

第81回 (R6. 9)

馬庭の492球に

8月19日、甲子園の準々決勝で大社高校が敗れた直後、その健闘を称えるかのように、稲佐の浜に虹がかかった。田舎の公立高校が、強豪校を次々と撃破できたのは、チーム一丸となった、勝利に対する飽くなき執念と集中力に他ならない。

その中心にいたのが馬庭投手である。気迫のこもった投球で強力打線をねじ伏せ、エラーした仲間を励まし、決勝打まで放った。闘志をむき出しにして雄叫びを上げる姿に、観客はもとよりマスコミまでもが、彼の虜になった。4試合を通じた「魂の投球」は実に492球にのぼった。

さて、公民館では「夏休みの子どもの居場所づくり」が終盤を迎えている。8年目を迎えた今年は、29日間36のプログラムに延べ7百人の子ども達に参加した。年々成長する子ども達を見るのは実に楽しい。

しかし、一方で気になることもある。人の話をきちんと聴けない子が、少なからずいるのだ。講師やガイドの大人が一生懸命説明しているのに、私語やふざ

けたりする。注意してもなかなか止めない。そんな時は思い切り叱りつけるが、今の子は叱られた体験が少ないように思える。家庭も学校も優しさに満ちている。「嫌なことはしなくていい」「辛かったらやめればいい」という風潮がある。そのように対処すべき子どもがいるのも事実だが、これが安易に浸透していくのは怖い。あと数年でこの子たちは高校生になる。彼らの中から、馬庭君をはじめとする大社ナインのような、集中力と気迫を持った高校生が生まれるだろうか？ はなはだ心もとない。

「江夏の21球」という山際淳司のノンフィクションがあるが、いつの日か「馬庭の492球」が世に出るかもしれない。その日を楽しみに、私はこれから子ども達に対し「怖いジジイ」であり続ける。